

経営倫理士の日線で古典を読んでいた♪

～古典から学ぶ経営価値四原理システム～

経営倫理士コンソーシアム

代表幹事

北村和敏

第一回投稿（2025 年 10 月 10 日）

〈『功利主義』J・S ミル〉



日本経営倫理学会の創設者、故水谷雅一氏の不朽の名著『経営倫理学のすすめ～経営価値四原理システム～』に照らして、ミルの思想を見ていくと四原理システムの理解が深まります。経営価値の四原理には競争性、効率性、社会性（環境性）、そして人間性があります。経済において競争と効率を高めることは生産性の向上に繋がります。しかし反面、競争（性）の行き過ぎは公害や不正といった社会性を毀損する問題が発生します。さらに効率性の行き過ぎは、長時間労働や過労死問題など人間性（人権）への負の影響が表面化します。そうなのです。この経済性（競争性と効率性）と公共性（社会性と人間性）は一見トレードオフの関係にあるように思えますよね。

これを功利主義の視点で捉えてみると、ベンサムの量的功利主義は経済性を重視した利益至上主義の世界です。利己的であり、自己中心的な世界です。まさにベンサムが言及した「快樂の量が同じであれば、プッシュピンと詩は同じくらい良い」に似ていますよね。それに対してミルの質的功利主義は、公共性に軸足をおいた思想と位置づけられそうです。利他的であり、共感・共鳴という定量化できない感性の世界で競争と効率の世界を包摂しています。つまりベンサムの量的功利主義が経済性の世界オンリーだとすると、ミルの質的功利主義は経済性を公共性で包含している世界なのです。

そうなのです。ベンサムとミルの思想は拮抗ではなく、ミルの思想に包含されたベンサムの思想であるということです。公共性からスタートした競争であり、共感・共鳴に軸足

を置いた経済成長です。今風に言えば「サステイナブル」な世界ですね。利益を至上とする強欲資本主義に終止符を打って、ステークホルダーすべてに利益を還元していく資本主義です。資本主義の檻の中の環境を「経営価値四原理システム」で快適な環境に変えていくことが今、まさに求められているように思えますね。(北村)

【コラム】

功利主義を、時代の変遷とともに俯瞰すると功利主義の印象が変わってくるようです。19世紀は民衆が力を付けてきた時代背景があります。18世紀の絶対王政の時代は、民衆は陰に追いやられた存在でした。それが革命を境に民衆が力を付け、民衆の声こそが正義だという時代に入っていきます。この民衆の正義は資本主義を発展させていきます。それまでは王様の言うことが絶対だったのが、民衆による数の力が社会を動かす原動力となっていく。反面、民衆が方向性を決めるため、多数決による投票が正義となっていくと、少数派の意見は反映されなくなっていく。まさに多数派による専制の世界が構築され、マイノリティが時代の陰に追いやられる弊害も内包します。

そして時代は産業革命に火が付き、近代工業化社会へと向かっていきます。工業化は男性と女性の役割分担化を促進し、外で働く男性と家庭で子育てする女性という性別役割分業化が進みます。家父長制の原理が働くわけですね。

ミルが生きた時代は資本家と労働者の関係は支配と従属の関係であり、男性と女性の間も支配と隷従の関係だったのです。男性が中心となって政治経済を動かしていきます。人材を育成する教育機関も男性を中心の教育システムが構築され、女性の教育は隅の方に追いやられたのです。いつしか男が上で、女は男に従う風潮が出来上がっていきます。

それに異を唱えたのが、イギリス初期のフェミニズム運動家のバーバラ・ボディションです。彼女は22歳の時にミルの『経済学原理』に興味を持ち、既婚女性の財産権の獲得を主張します。このような運動家の中に女性参政権の獲得を目指すティラー夫人もいたのです。女性の地位向上に向けてやるべきことは、「女性は生まれながらに男性よりも劣った存在」という偏見に基づく慣習（ヴィクトリア時代の価値観）を改めることが不可欠だったのです。同時にティラー夫人に影響を受けたミルは女性の経済的自立のための女性教育、専門的職業教育の必要性を主張しています。ミルが著した『経済学原理』と『女性の隷従』には家父長制への批判と完全なる男女同権の原理が記されています。当時の現状は、まさに教育が不十分な女性たちは男性の下に置かれた存在、つまり男性による女性の隷従が当り前の世界だったのです。この女性の隷従は、女性の天賦の能力を発揮しその人格を完成させることを妨げていたのです。家庭、経済、政治の三分野における女性の解放こそが、人類の進歩、社会の革新に繋がることをミルは主張したかったようです。(北村)